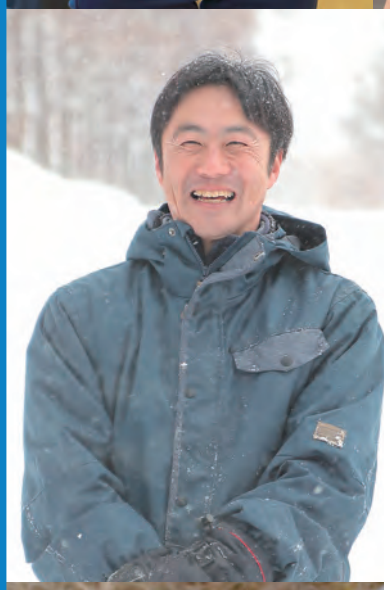


世界を元気にした人は、日本も東北も元気にできる。

日本も元気にする
青年海外協力隊

Japan Overseas Cooperation
Volunteers Stories

東北編

Japan
TOHOKU
東北

Bhutan
ブータン

Thailand
タイ

Ghana
ガーナ

Tanzania
タンザニア

Botswana
ボツワナ

世界へ飛び出し、さまざまな人たちを笑顔にする。
気づけば自分も笑顔になっている。
笑顔はつながるんだ。
よろこびの笑顔は世界共通。
世界で、笑顔をつくった人は、
日本でも笑顔をつくるんだ。

Vanuatu
バヌアツ

Costa Rica
コスタリカ

STORY1 青森

［派遣国］
Botswana
ボツワナ

適地適作の農業を目指して
地域の人と共に
安心な野菜を届けたい。

山田 広治さん

有限会社サニタスガーデン
取締役

STORY2 岩手

［派遣国］
Bhutan
ブータン

幸せの国ブータンで学んだ
価値観を地域の人たちに伝え、
暮らしを楽しむ。

田山 まりさん

雫石町地域おこし協力隊

STORY3 岩手

［派遣国］
Costa Rica
コスタリカ

地域の人と共に
課題に向き合い、人と人が
支え合えるまちづくりを。

元持 幸子さん

NPO法人つどい
事務局長

STORY4 宮城

［派遣国］
Tanzania
タンザニア

豊かな自然と人との
交流を通じて、子どもたちの
自発的な成長をサポート。

稲村 友紀さん

公益社団法人MORIUMIUS

STORY5 宮城

［派遣国］
Thailand
タイ

タイで野球の楽しさを広めた
経験を、国際理解教育の
充実のために生かす。

佐藤 漸さん

学校法人聖和学園高等学校
教諭

STORY6 秋田

［派遣国］
Vanuatu
バヌアツ

暮らしを発展させる
仕組みをつくり、ふるさとの
経済振興に貢献する。

石田 義治さん

秋田県産業労働部
商業貿易課

STORY7 山形

［派遣国］
Ghana
ガーナ

井戸の設置で安全な水の
供給が可能に 途上国での
経験を今後は地域のために。

大内 真里生さん

株式会社シェルター
総務部 秘書広報室

※所属部署・役職名は、取材当時のものです。

STORY 1
JICA TOHOKU

— 青　森 —

適地適作の農業を目指して 地域の人と共に安心な野菜を届けたい。

山田 広治 KOJI YAMADA

［派遣国］
ボツワナ Botswana

［職種（活動分野）］
野菜栽培

有限会社サニタスガーデン 取締役

青年海外協力隊に参加後、株式会社野菜くらぶの独立支援プログラムに参加。研修終了後、群馬県で有限会社サニタスガーデンを設立。一方で青森県に通い耕作放棄されていた土地を1年かけて畑に。現在は青森県へ移住し、高原野菜の栽培を行っている。

帰国後の活動

安心安全な野菜を安定して届けたい

以前から農業に関心があったものの、農業の道に進む決心ができないでいた山田さんだが、ボツワナで農業の喜びと奥深さを経験し、帰国したときには農業で生きることを決意していた。ボツワナでの経験から山田さんは「自分たちで安心安全な野菜を安定して供給するシステムを作る」農業を目指していた。

株式会社野菜くらぶの独立支援プログラムは、研修生を受け入れ、農法を体得させ、他の土地で独立させるというものだった。早速応募し、その一期生として群馬県のレタス大規模栽培第一人者のものとで1年の研修を受けた。研修中に株式会社野菜くらぶの澤浦社長と、夏と冬のレタス栽培のできる産地を探し、青森県黒石市沖揚平で耕作放棄されていた土地を畑にするところからスタートした。農業は野菜を育てるだけでなく、土地や作物に合った肥料や機械の準備など仕事は山積み。現在は青森県へ移住し、15ヘクタール規模でレタス、キャベツ、白菜などの栽培を行っている。

移住後に結婚し3人の子どもたちに囲まれて暮らす日々。「自分の子どもが青年海外協力隊に行きたいと言ったら?」と尋ねると「大歓迎です。自分の人生に大きな影響を与えてくれた貴重な体験でしたから。ボツワナでの2年間はどんな環境の下でもやっていけるという自信を私に与えてくれました」と話す。

地域の人たちにアドバイスをもらいながら一緒に作り出している今の農業には、ボツワナでの経験も十分に生かされている。

八甲田山の麓で高原野菜を栽培している山田さん。

現地での活動 Botswana

試行錯誤を重ね現地に合う技術を伝える

派遣先の村では当時、20人ほどが1つのチーム（共同体）になり、2ヘクタール規模の土地を共同の畑として利用していた。ケールなどのアブラナ科の野菜栽培が行われていたが、水不足でもあった。そんな中で山田さんが取り組んだのは、現地の自然に合った野菜品目を探し、水源を確保することだった。試行錯誤を重ね、いろいろな野菜をテスト栽培したが、人々が作ってくれたのはニンジンだった。そして収穫後には、ロバ車しかなく遠くに売りに行けなかった彼らと、町まで車で販売に出掛けた。

山田さんは「生産を安定させて、継続的に販売をしていく仕組み作りを目指していました。現地の人と話して課題を探り、何ができるのか見極め、粘り強く続けていくことの大切さを学びました」と話す。

仕事が終われば同僚に混ざり、歌ったり、時にはお酒を飲んだりしながら少しずつ、地域の人たちに受け入れられていることを実感。ボツワナの人々の優しい人情味あふれる温かさを日々実感することができたという。その土地に合った品目を一緒に探し、土を作り、栽培して収入を増やせたことが、ボツワナの人々に喜ばれた、この体験から山田さんは農業で生きることを決意したという。

村人と水汲みへ

ロバも大切な農場の仲間

農場メンバーと畑にて

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

たくさんの笑顔をあなたの手で創り出してください。

学生のときに「開発途上国を見ると良い」と先生からアドバイスをいただき、27歳のときに青年海外協力隊でボツワナという国を初めて知りました。技術を持っている日本人が、世界中で活動できるのがボランティア事業です。技術は人を幸せにすることができます。たくさんの笑顔をあなたの手で創り出してください。

VOICE 上司に聞く！

株式会社野菜くらぶ 専務取締役
毛利 嘉宏さん

独立支援プログラム一期生として活躍している山田さんの姿をみて、このプログラムに挑戦し、新規就農した方が14名もおります。彼は当時から秘めた熱意ややり続ける意思の強さがあり、行動することで周りの人たちから信頼を得ています。野菜の販売を担当している私たちと山田さんは良きパートナーであり良いチームでもあります。

STORY2
JICA TOHOKU
— 岩手 —

幸せの国ブータンで学んだ価値観を地域の人たちに伝え、暮らしを楽しむ。

田山 まり MARI TAYAMA

［派遣国］
ブータン Bhutan

［職種（活動分野）］
青少年活動

雫石町
地域おこし協力隊

中学生の頃から海外での生活に興味を持つ。大学卒業後、東日本大震災の被災地でのボランティア活動をきっかけに、青年海外協力隊への参加を決意。帰国後は、地域おこし協力隊として雫石町の町おこしに尽力している。

現地での活動

子どもたちに西洋美術を紹介

ブータン第二の都市、パロの小中学校で、5歳から16歳の子どもたちに図工を教えた。ブータンは、物質的には豊かとは言えないが、教育費は無料で、幼稚園から英語教育を取り入れるなど、国の将来を担う子どもたちの教育に力を入れている。

仏教絵画や仏像など、優れた仏教美術がたくさん残されていることでも知られているブータンだが、西洋的な絵画や彫刻などには馴染みがない。イギリスの大学で現代絵画を専門に勉強していた田山さん。自分が学んできた美術を子どもたちに教えることになったが、西洋式の美術に馴染みのない子どもたちに伝えるのは簡単ではなかった。しかし、戸惑いながらも子どもたちは純粋に授業を楽しんでくれている様子だった。図工クラブも担当し、教科書の編集事業にも関わった。子どもたちとの関わりや同僚との仕事はやりがいがあり、楽しんで活動することができた。

日本にいたころは、欲しいものや必要だと思うもの、知りたいことや行きたいところがたくさんあって、お金がなければ不安だと思っていた。しかしブータンでは、経済的な豊かさよりも、精神的な豊かさが重んじられていて、福祉が手厚く、信仰心が深い。健康に生活を送ることを重んじられている。「精神的な豊かさや健康が幸福につながるという、ブータンの人たちの価値観を学んだ」と田山さんは振り返る。

子どもたちと一緒に登校

タクツァン僧院にて

子どもたちと一緒に

帰国後の活動

顔が見えるところで仕事をしたい

帰国後、田山さんは雫石町の地域おこし協力隊に就任。住民の方々がワークショップ形式で話し合う「地域づくり会議」の運営、地域づくりのフリーペーパーの発行、ホームページの更新などを通して、地域の住民による地域活性化のための活動をサポートしている。「雫石町おこしセンターしずく×CAN」のリノベーションの際には、看板や案内板、メッセージボードなどを担当した。

学生の頃は、都会や海外での生活に魅力を感じていたという田山さん。しかし、ブータンの小さい町に暮らしその町の学校で働く、という経験をし、「毎日顔を合わせて、関係を築き合いながら働く」生活に魅力を感じるようになった。盛岡市出身の田山さんだが、顔が見える小さなコミュニティで働きたい、と雫石町の地域おこし協力隊になる道を選んだ。

雫石町での暮らしは、町を歩けば知っている顔ばかり。知り合いのお店で、知り合いが作ったものを買う。そんな、顔が見える環境での生活が楽しい、と田山さんは感じている。また、地域おこし協力隊として、地域に住む様々な年代、様々な職業の人々と接するときも、「ブータンで、異文化の人々と生活した経験があるから、様々な考えを持つ人たちとのコミュニケーションが楽しくなった」と語る。

盛岡市や雫石町の小学校などでブータンでの経験を紹介するワークショップを行う機会も多い田山さん。地域の子どもたちが海外に目を向け、海外からの移住者を地域で温かく迎え入れられるよう、自らの経験を地域の皆さんのために役立ていきたい、と考えている。

田山さんがリノベーションに携わった「雫石町おこしセンターしずく×CAN」にて。

Bhutan

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

視野を広げて新しい価値観を感じてみませんか。

視野が広がることで、新しい価値観に気付くこともあると思います。私自身、ブータンの人たちの幸福の価値観を学んで、これまで縛られていたことから自由になったり、苦手だと思っていたことができるようになったりしました。一見、難しそうに見えることも、挑戦してみると案外できるものです。チャレンジしてみませんか?応援しています。

VOICE 同僚に聞く！

雫石町地域おこし協力隊 地域づくりサポーター
秀島 杏奈さん

地域おこし協力隊の1年先輩の田山さんは、なんでも話せて頼りになる存在です。海外経験が豊富なので、考え方が柔軟というか、懐が広いですね。語学も堪能で、役場に英語の問い合わせが来たときなど、頼りにされています。絵が得意でデザインのセンスも高く、広報誌の作成などでスキルを発揮していただいています。これからもよろしくお願いします!

STORY3
JICA TOHOKU
— 岩　手 —

地域の人と共に課題に向き合い、人と人が支え合えるまちづくりを。

元持 幸子 SACHIKO MOTOMOCHI

［派遣国］
コスタリカ Costa Rica

［職種（活動分野）］
理学療法士

NPO法人つどい 事務局長

JICAのCBR（地域に根差したリハビリテーション）プロジェクトに興味を持ち、青年海外協力隊に参加。帰国後、東日本大震災をきっかけに出身地である大槌町に戻り、NPO法人つどいを立ち上げる。大槌町NPO・ボランティア団体連絡協議会会長。

帰国後の活動

地域の人たちと共に、まちづくりを続ける

帰国後、仙台の医療系専門学校に教師として勤務していた元持さん。帰国して2年目の春、東日本大震災が起こった。自宅は地震で倒壊し、勤務先の学校は避難所に。家族が住む大槌町は、交通も通信も途絶え、連絡も取れない。元持さんは、災害時に緊急人道支援活動を行う医療チームAMDA（アムダ）の一員として、震災から3日後に被災地に入った。大槌町が受けた津波の被害は甚大で、多くの命が失われた。元持さんは、復興支援のために自らの出身地である大槌町に留まることに決めた。

震災から1年後の2012年、人と人とのつながりが作る社会の再建“ソフト面でのまちづくり”を地域の人たちと共に行うため、元持さんは「NPO法人つどい」を立ち上げた。道路や建物の建設など、ハード面でのまちづくりは支援に頼るしかないが、ソフト面でのまちづくりは自分たちでできる。「つどい」では、手作りの品の販売を行うクラブ「おばちゃんくらぶ」の運営サポートや、地域の人が集まって話ができる場（まちの縁側）の提供、フリーマーケットの開催などを通して、町の人たちが自ら発言したりアクションを起こすためのサポートをしている。青年海外協力隊でコスタリカの人たちの課題を解決するためのサポートをしてきた経験を、今度は、日本国内での課題解決のために活かしたいと考えている。「私の地元である大槌町に根を張って、地域の人たちと共に支え合えるまちづくりを目指していきたい」と元持さん。

協力隊での経験を、地元大槌町での復興支援に生かす元持さん。

現地での活動 — Costa Rica

現地スタッフと試行錯誤の日々

中米コスタリカの地方病院で、CBR（地域に根ざしたリハビリテーション）の普及プロジェクトに理学療法士として参加した。現地での体験は、「日本では当たり前のことがコスタリカでは当たり前ではない、価値観は多様である」という実感につながるものだった。

コスタリカではかつて、農薬の影響から障害を持って生まれてくる子が多かった。交通事故の発生率も高く、障害を持つ人が数多く生活をしている。しかし、リハビリテーションという考え方が普及しておらず、障害者が社会的に自立するための制度や、日常生活を送るための支援は十分とは言えない。元持さんは、そのような状況にあるコスタリカで、現地の病院で理学療法士として活動しながらワークショップを行うなど、リハビリテーションの普及に務めた。

赴任先の病院では、現地スタッフと共に、障害を持つ患者さんたちが退院後に不自由なく生活をするにはどうしたらいいか、社会復帰するためにどんな支援ができるかなど、患者さん一人ひとりに寄り添い、課題解決のために活動した。「日本にいると成果を求められることが多いけど、プロセスの大切さを知った」と元持さん。現地の人と一緒に考えて一緒に行動した、そのプロセスこそが現地の人たちに経験として根付くのではないか、と元持さんは考える。

活動先の病院にて院長と

健康増進についてのレクチャー

日本から、車いす等の物品の支援を受けた

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

行動や考え方が変わるほどの体験です。

少しでもチャレンジしたい気持ちがあったら参加してみることをおススメします！ 海外の人々と生活を共にし、文化の多様性に触れることで視野が広がり、日本という国や、自分自身に対する見方が変わると思います。私自身、協力隊に参加した経験があったから、現在、地域の人たちとまちづくりを行う仕事をしているんだと思います。

VOICE 仲間に聞く！

大槌町社会福祉協議会 総務課 地域福祉係
ボランティアセンター担当
渡辺 賢也さん

元持さんとは、大槌町NPO・ボランティア団体連絡協議会の活動や、「NPO法人つどい」のイベント協力などで一緒に仕事をしています。青年海外協力隊での経験を活かし、地域の課題に対し、常に柔軟な発想で取り組む元持さんは、この大槌になくてはならない存在だと思います。これからも地域のために手腕をふるってください！

STORY4
JICA TOHOKU

— 宮　城 —

豊かな自然と人との交流を通じて子どもたちの自発的な成長をサポート。

稲村 友紀 YUKI INAMURA

［派遣国］
タンザニア Tanzania

［職種（活動分野）］
数学教育

公益社団法人 MORIUMIUS（モリウミアス）

MORIUMIUSは、東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市雄勝町の高台に残る廃校を活用した複合施設。海と山に囲まれた、この場所にしかない自然環境を活かしたアクティビティを通して、子どもたちの成長をサポートする多様な学習プログラムの企画運営に関わっている。

帰国後の活動

子どもたちの未来が拓けるきっかけをつくりたい

東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市雄勝町で、子どもたちに自然を通した体験プログラムを提供する「MORIUMIUS（モリウミアス）」のスタッフとして働く稲村さん。「帰国後は子どもたちの教育に関わりながら被災地の復興に貢献できる仕事をしたいと思っていました。雄勝町に来てからは、人が地域の財産だなと感じることが多いですね」と語る。「震災をきっかけにこの町から多くの人が離れてしまいましたが、あえてここに住むことを選んだ方が多くいます。その方たちが経験したことや感じていることも子どもたちに伝えていきたいです。体験プログラムの中では、なるべくこの地域に住む方たちとの交流が持てるようにしています。多くの人とコミュニケーションを取ることで、人付き合いの方法を知るきっかけにもなってほしいです」。

現在、週に2〜3回、雄勝町の隣にある女川町でも子どもたちへの教育に携わる稲村さんは、「これからも子どもたちへの教育に関わっていきたい」という夢を語る。「子どもたちは学校での勉強以外にもたくさん学ぶことがあると思っています。できればもっとたくさんの大人の方たちに教育に携わってもらうことで、子どもたちには“こんな職業があるんだ”とか、“こんな生き方もあるんだ”という気づきも届けたいですね。そして、ここ雄勝での体験が訪れた人それぞれの世界を広げるきっかけになってほしいと思っています」。

自然を通した体験プログラムを提供する稲村さん。

現地での活動 Tanzania

一人ひとりと向き合う教育を目指す

タンザニアでは、女子中等学校で数学科の授業をサポート。現地の教員と相談をしながら授業内容を組み立てたり教材の研究などを行っていた。教材として折り紙を使用してみたり、普段より問題演習の時間を多く取ってみたりと、稲村さんならではの工夫を取り入れた授業で教壇に立つこともあったという。「赴任先はタンザニアの中でも優秀な生徒たちが集まる学校。もっと勉強に一生懸命かと思いきや、授業中に眠そうにしたり集中力が続かなかったりと日本の生徒たちと変わらないんだなと思いましたね。でもそれは国や環境の違いで私が勝手に思い込んでいただけ。“どこの国の人だから”ということではなくて、しっかりと一人ひとりに向き合わないといけないというのは大きな学びとなりました」。現地の生徒たちには稲村さんが得意とするチアダンスを一緒に踊る機会や、日本の生徒たちとの交流授業を通して新しい文化を知るきっかけも提供。さらに生徒たちからはスワヒリ語を教わるなど、タンザニアでのさまざまな経験は稲村さん自身の考え方にも変化をもたらしていった。

「協力隊に参加する前までの私は、失敗したらどうしようと躊躇してしまうタイプでした。ですが、タンザニアでの経験を通して、“ゼロからでもとりあえずやってみよう”と小さいことから一歩を踏み出せるようになりました」。

みんなでチアダンス

授業の様子

インターネットを通した日本との交流授業

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

いろんな経験や人に出会ってほしいです。

迷うことはたくさんあると思いますが、青年海外協力隊に参加したすべての経験が自分の糧になります。日本に帰ってくると、活動を通して出会った人たちが世界のどこかにいて、その存在が自分を支えてくれているという安心感からまた一歩踏み出せる機会もたくさんあるはず。ぜひいろんな経験に、そして人に出会ってほしいなと思います。

VOICE 上司に聞く！

公益社団法人MORIUMIUS 理事
油井 元太郎さん

一見柔らかな印象を受けますが、青年海外協力隊を経験したからか実はとてもタフ。何事にも物怖じせずにチャレンジしてくれています。指示を待つのではなく自分でやるべきこと、やりたいことを考えて実行できることも彼女の強み。今後は地元の子どもたちや地域の方との交流の中で見つけた自分のやりたいことに、さらに取り組んでもらいたいです。

STORY5
JICA TOHOKU
— 宮　城 —

タイで野球の楽しさを広めた経験を国際理解教育の充実のために生かす。

佐藤 漸 ZEN SATO

［派遣国］
タイ Thailand

［職種（活動分野）］
野球

学校法人聖和学園高等学校
教諭

帰国後は高校の英語教員に。国際化が進展する中、生徒たちに広い視野と異文化に対する理解につながる授業やワークショップを行う。また、「宮城県高等学校国際教育研究会」の役員として組織で宮城県の国際教育理解を推し進める活動も行なっている。

帰国後の活動

教師として高校生と世界を結ぶ役割に

帰国後は、高校生の頃から長年の夢だった教師の道へと進んだ。佐藤さんは英語教師として、「タイでの協力隊活動を経験したからこそ教えられることがある」と感じているという。「それは、世界の多様な文化・価値観や課題を理解したり、日本人として自国の理解を深めるという姿勢です。例えば、連日海外のニュースが伝えられていますが、それを見聞きしただけでは国際関係の面白さはわからないですよね？ だから生徒たちには、僕が協力隊の活動の中で感じた“世界に目を向けることの楽しさ”を広めたいんです」。

現在は学校内に新設された「国際教育センター」で国際交流活動を推し進める一方「宮城県高等学校国際教育研究会」にも所属し、県内の高校生に向けた国際理解教育のボトムアップに尽力している。「海外に留学する人のほとんどは、何のために留学するのかを考えていないことが多いような気がしています。ただの“海外かぶれ”になってしまうのでは意味がない。日本人として身に付けないといけないことを留学の中でも考えよう、と伝えていきたいですね。今は海外に行かなくてもインターネットなどを介して国際交流できる時代だからこそ、日本らしさにもっと注目をした国際理解教育をしていきたいと思っています。まずは、海外に目を向けることが大切です。私の役割は、生徒たちに対して世界との接点を持つ垣根を低くしてあげることだと思っています」。

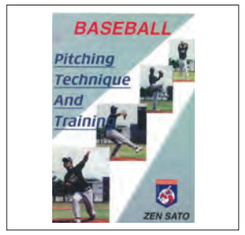
和やかな人柄の中に、国際交流への熱くアグレッシブな思いを抱く佐藤さん。

現地での活動 Thailand

野球の技術とプレイの楽しさを伝える

現地ではアマチュア野球連盟の職員として、野球のルールや礼儀を伝える普及活動を行なった佐藤さん。タイに野球を定着させるために指定された学校を数ヶ月ごとに巡回。プレイする楽しさを伝えつつ、一人ひとりのレベルアップを目指し指導を行なった。「当時、タイの一般市民はまだ野球に馴染みが無く、ユニフォームを着ていると“それはホッケーのユニフォームか?”なんて言われたり、グラウンドがボコボコだったりしたこともありました。これじゃ野球の面白さはちっとも伝わらないなと思いましたね。まずは、野球をするための環境を整えることから始め、ボールの投げ方やグローブの使い方などを教えていきました」。最初は興味本位で練習に参加していた人が、「楽しいから一緒にやろうよ」と知り合いを誘って練習に来てくれるようになった。佐藤さんは「その時は本当にうれしかったですね」と振り返る。

タイでの活動中は、日本語の意味や文化について聞かれる機会も多かったが、質問を投げかけられても答えられずにもどかしい思いをしたこともあったという。「改めて考えてみると、当時は日本の文化や言葉の意味について知らないことが多かったんですね。その時以来、私は日本のことについて理解を深めようと思いました。これは協力隊に参加したから気づけたことです」。



タイ派遣中に作成した野球教本

当時立ち上げたタイ少年野球の子どもたち

野球連盟、ソフトボール連盟の方々と再会

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

特別な思いに火を付ける体験が待っています。

「青年海外協力隊に行ってみたい」、「どんな活動ができるのか興味がある」と思っている方は、もうすでに何か特別な思いを持っている方だと思うんです。青年海外協力隊の活動は、その思いの奥底にさらに火を付けてくれるような貴重な経験ばかり。少しでも興味を持った方は、ためらうことなく踏み込んでほしいですね。

VOICE 上司に聞く！

学校法人聖和学園高等学校 教頭
片倉 ゆかりさん

佐藤先生はとにかく創造性豊か。学校生活の中でも常に新しいことや楽しいことを考え、そのアイディアをさまざまな形にしてくれる頼れる存在です。ムードメーカーでもあるので、先生、生徒とともに周囲を和ませてくれる雰囲気が親しまれていますね。これからは協力隊の経験を活かして国際交流の面で活躍してくれることを期待しています。

STORY6
JICA TOHOKU
— 秋　田 —

暮らしを発展させる仕組みをつくり、ふるさとの経済振興に貢献する。

石田 義治 YOSHIHARU ISHIDA

［派遣国］
バヌアツ Vanuatu

［職種（活動分野）］
村落開発普及員

秋田県産業労働部 商業貿易課

大学院修了後すぐに青年海外協力隊に参加し、帰国後は秋田県庁に入庁。商業貿易課で、秋田港のPR事業や貿易および企業の海外展開の振興を担当している。2015年から青年海外協力隊秋田県OB会の事務局長。

現地での活動

水産・畜産市場を建設し、立ち上げる

赴任国である南太平洋のバヌアツは、持続的な暮らしが可能という点で、かつて『世界一幸福度指数の高い国』に選ばれたことがある国だ。「ただ実際に行ってみたら、貨幣制度が徐々に浸透していたものの、水産資源を鮮度よく流通させる仕組みができていないなど、いろいろな課題がありました」と石田さん。

当時、バヌアツは水産資源の流通システム構築の遅れから、魚を鮮度のよい状態で手に入れるのが難しい状況だった。そのため農林水産省の州水産局に配属となった石田さんの活動は、新鮮な水産物と畜産物を購入できる市場を建設し、地域の人たちで運用できるようにアドバイスすることだった。「この活動は、4年前から二人の先輩隊員が進めていたものだったので、漁業者が組織化されていたし、地域の人たちのモチベーションも高く、スムーズに行うことができました」。

また、漁場として成り立たなくなっていた海岸のマングローブ林を、地域の新たな収入源にするために禁漁区にし、観光客向けの自然公園に開発する活動も行った。「僕の活動は、地域の人が経済的に独り立ちできるように、仕組みを作って託すことでした。僕の後任隊員は若手漁業者の育成などに取り組んだそうです。協力隊のこうした活動が地域に根づき、バヌアツの経済発展に少しでも寄与できれば嬉しいです」。

ヤム収穫

協力隊の仲間と

自然公園ビジターセンター建設

Vanuatu

帰国後の活動

秋田港の貿易促進活動を担当する

バヌアツでの協力隊経験は、世界中の魚を日本に輸入するバイヤーの仕事をしたいと考えていた石田さんの職業観に大きな変化をもたらした。

「バヌアツでは、外国船がバヌアツの海で漁をして日本のような先進国に輸出しています。つまりバヌアツの水産資源で収入を得ているのは外国船なのです。しかも、そうやって輸出された水産資源が他国で大量消費・大量投棄されてしまうと、現地の水産資源は乏しくなり、結果的に持続的な暮らしをしている国の存続が危うくなってしまいます。その現実を知るうちに、僕は民間の自由競争原理の中で仕事をするよりも、行政の立場から地域経済を伸ばすお手伝いしたいと思うようになったのです。」

帰国後、秋田県に入庁。県税事務所での勤務を経て、現在は産業労働部の商業貿易課で働いている。仕事内容は、海外展開を検討している県内企業に対し、外国人向けのPR方法や専用の人材採用の必要性を伝えるといった相談・指導業務だ。同時に、秋田港を広くPRする仕事も任されている。主に全国的に展開している県外の企業を訪問し、秋田港を使った貿易を勧めるというものだ。

「秋田港は日本と世界を結ぶ物流の拠点なので、秋田港の貿易を活発にすれば地域経済の活性化につながります。また秋田港が北東北3県の窓口となってロシアや東アジアと交流を深めれば、日本経済の発展にもつながります。この仕事を通して、地域や日本の経済発展の一翼を少しでも担えればなと思っています」。

ふるさと秋田で地域振興に携わる石田さん。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

多面的に物事を捉えるきっかけになります。

海外に出ると客観的に日本を見ることができ、日本の常識が世界の常識ではないとわかります。僕は日本に魚が輸入されている国に行って、日本の大量消費・大量食品ロス問題を実感しました。こうした外からの視点は多面的に物事を捉えるきっかけとなり、帰国後の仕事に活かすことができます。ぜひ協力隊に参加して視野を広げてきてください。

VOICE 後輩に聞く！

秋田県産業労働部 商業貿易課
竹ヶ原 依李さん

貿易課は仕事柄、海外のお客様が多いのですが、石田さんは魚や釣りの話を切り口にすぐ仲良くなっていくんですね、すごいと思います。また思いやりもあって、私のような後輩をサポートしながら潤滑油のようにチームのバランスをとってくれています。私にとって初めての職場の先輩である石田さんには、感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。

STORY7
JICA TOHOKU
— 山　形 —

井戸の設置で安全な水の供給が可能に
途上国での経験を今後は地域のために。

大内 真里生 MARIYO OUCHI

［派遣国］
ガーナ Ghana

［職種（活動分野）］
村落開発普及員

株式会社シェルター
総務部 秘書広報室

様々な業種で仕事を探していた時に見つけた「社長秘書」の募集案内。仕事で多くの案件を調整した経験が活かせると思ったこと、そして地方都市ながら国内外の学生を対象にしたデザインコンペを行うなど海外と直接繋がっていることに興味を持ち入社を決意した。

現地での活動

現地の人と共に井戸を設置

ガーナで携わったのは、前任者から引き継いだ北部地域での井戸建設プロジェクト。インフラがほとんど整っていない地域の中、現地の人たちとコミュニケーションを図りながら、プロジェクトサイトとして選定された15の村に井戸を設置していった。大内さんは「建設に必要な書類の作成をお願いしてもなかなか準備が整わず、気を揉むこともありました」と振り返るが、そんな時は「いろんな考えを持った人がいて当たり前」と考え、ポジティブに捉えたと語る。「些細なことにこだわらず、その状況を楽しむ。そして何か問題が起きた時には、自分で面白い方向に変化させていけばいいんだ、と考えるようになりました。まずはとにかくどんな状況でも自分が楽しんで仕事に取り組む。またその一方で、“ガーナのために”という思いを持って活動に対して積極性を持てたことやさまざまな問題に突き当たっても寛容な気持ちでいられたことは、協力隊の経験の中で培われたのだと思います」と振り返る。そして、試行錯誤の末に15の村すべてで井戸が完成。「ガーナの人たちはあまり感情を表に出すタイプの人たちではなかったのですが、水が出た時はすごく喜んでくれました。工事をしている時から集まってくれましたから、それだけ期待が高かったのかもしれません。村に1基ずつ設置できたことは本当によかったです」。

井戸維持管理のトレーニング中

完成した井戸

井戸建設チーム

帰国後の活動

何事にも前向きに取り組む姿勢を心がける

帰国後はJICA山形デスク国際協力推進員を3年間勤めたのち、山形市内にある建築関係の会社へ就職。輸入部材を扱うなど海外とのつながりがある会社のため海外経験が活かせることや、「山形の中でも革新的で面白そうなことをしている企業」だと感じたことから入社を決意した。「私が活かせると思ったのは、一度に多くのことを同時に進行させるスキルですね。ガーナでの活動も現在の仕事も、同時進行の案件がたくさん。その中で自分が何をすべきかを見定める力は、トラブルがあっても前向きに取り組んだ協力隊の活動のおかげだと思います。また現地で井戸建設の目的をきちんと果たせたことから、自分の行動をしっかり肯定できるようになったことも後押しになりました」。さらに日本を外から見る経験を経たことで、もっと日本国内のことに目を向けるべきだと感じた大内さんは「山形の地域活性化についても関心を抱くようになりました。できることの一つひとつに取り組んでいきたいです」と強く語る。「協力隊の経験で得たことのもうひとつは、私にできることがあればやってみようという思い。今は山形がどうしたらもっと賑わいのある街になれるのか、若い人の流出を食い止めるためにはどうしたらいいのかということにも関心があります」。今後は会社に新設される「海外戦略室」での活動のほか、山形県内の協力隊OBOGで構成された山形県青年海外協力協会での活躍も期待されている。

「まずはできることをやる。何事も楽しむことが大事」と語る大内さん。

Ghana

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

チャンスがあったらぜひ飛び込んでほしいです。

私が協力隊の試験に合格した時、母親から「チャンスはその時しかないんだよ」と言われたことがありました。今振り返ってもその通りだと思います。何かを始めるのに遅いことはないですし、自分の選択肢を狭めるのも広げるのも自分次第です。NOと決めるのではなく、まずやってみる。自分の“チャレンジしたい”という思いを素直に感じてみてください。

VOICE 上司に聞く！

株式会社シェルター 取締役
木村 茂さん

大内さんが青年海外協力隊を経験してきたという経歴の豊かさに驚きましたね。入社後は真面目で積極的に仕事をしている姿にとても頼もしさを感じています。当社は海外とのやりとりも多いので、海外経験のある大内さんはとても重要な存在です。新設された「海外戦略室」でも力を発揮してくれると大いに期待しています。

JICAプラザ

開発途上国や国際協力に関する図書、パンフレットを設置しています。
資料を自由にご覧いただけるオープンスペースです。
［開館時間］平日 9:30〜17:30

事例 市民参加イベント・市民講座

青森県

国際協力写真展2017
―繋がっている、世界と私たち―（弘前市）
青森県出身のJICAボランティアが撮影した
開発途上国の写真100点超を展示。

岩手県

ワン・ワールドフェスタinいわて（盛岡市）
ブースではSDGs（持続可能な開発目標）の理解を
深めてもらうためクイズを実施。

宮城県

JICAfe（ジャイカフェ）東北
アフリカ・マラウイ共和国の地理・文化・歴史・食事などについて、マラウイ人の研修員が説明。コーヒーを片手にわいわい交流。「日本の食べ物で好きなものは?」

秋田県

異文化理解講座（秋田市）
「世界の扉をノックしよう〜知ってみよう、シリアの暮らし〜」
映画上映に加え、シリアの青年海外協力隊OGが
内戦前のシリアの様子を伝える。

山形県

体験!実践!国際理解実践フォーラム
〜山形から世界をみてみよう!〜（山形市）
多文化共生や国際協力、国際理解教育など
さまざまな分野をテーマとして開催。

お近くのJICA窓口

青森デスク
〒030-0803 青森市安方1-1-40
青森県観光物産館 アスパム7階
（公財）青森県国際交流協会内
TEL 080-3140-2129

岩手デスク
〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通1-7-1
いわて県民情報交流センター アイーナ5階
（公財）岩手県国際交流協会内
TEL 019-654-8911
FAX 019-654-8922

秋田デスク
〒010-0001 秋田市中通2-3-8
秋田総合生活文化会館（アトリオン）1階
（公財）秋田県国際交流協会内
TEL 018-893-5313
FAX 018-893-5313

山形デスク
〒990-8580 山形市城南町1-1-1
霞城セントラル2階
（公財）山形県国際交流協会内
TEL 023-646-6267
FAX 023-646-8860

各県デスクの紹介
https://www.jica.go.jp/tohoku/pref/index.html

JICA東北
独立行政法人 国際協力機構

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4丁目6番1号
仙台第一生命タワービルディング20階
TEL 022-223-5151（代表） FAX 022-227-3090

JICA東北

独立行政法人 国際協力機構

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4丁目6番1号 仙台第一生命タワービルディング20階

TEL 022-223-5151（代表） FAX 022-227-3090

JICA東北

2018年3月